幼年期の成長発達と教育

田代高英

一

幼年期の成長発達という問題を取扱う場合、それをどういう立場から考察するかによってかなり取扱い方も変ってくる。従来、一般に成長とか発達とかいう問題が取扱われる場合には身体的な成長であるとか、知能あるいは情緒の発達であるとかいったいわゆる生理学や発達心理学の領域で取扱われることが多かった。しかし本稿では、そのような生理学的発達心理学的な問題を前提に置きながらも、この成長発達ということを身長や体重の変化とか、知的能力の増大とか、情緒性の複雑化とかいった、いわば分析的な取扱い方、あるいは量的な測定値の変化といった取扱い方をせず、もっと具体的な子どもの毎日の遊びや眠り、つまり育っている子どもがどのように変っていき、われわれはそれをどのように理解し育てていけばよいかといったいわば教育的な立場から眺めてみたいと思う。

このように考える場合、子どもの成長発達ということは、単に子どもの身長が伸び、体重がふえるということだけではなくて、はじめてこの世に生をうけた新生児が、おかあさんの手から家族の中へ、社会の中へと次第にその生活圏を拡げていくという場合にもいえるのである。周知のように「生きるとは学ぶこと」である。人は毎日の生活の中で絶えず何物かを学び、何かを経験しているのである。このようにわれわれが生活しながら学ぶということは、生活が人との関係においてあるということを意味している。生活とは人との接触においてあり、いゝかえれば人間社会の中においてはじめて生活はあるといえるのである。われわれが社会の一員として生活するときに、はじめて何物かを学び、何かを経験するのである。このように考えてくると、社会において人との接触の多い人ほど多くの経験をもつことになり、したがって子どもが次第に成長し、その生活圏を拡げて成人に変っていくにしたがって、経験領域も次第に拡大されていくことになる。こうして成人は子どもより広い多くの経験をもつのである。このように経験の拡大という点から幼児の成長発達をみる場合、そこに子どもの社会的成長ということが考えられるのである。

子供が新生児としてこの世に現われた時には、お母さん以外の誰をも知らないわけである。その子どもが次第にことばを覚え、這うことを覚え、歩くことを覚えるようになると、かれの生活圏は次第に拡大されていく。はじめは家族から、次には近所や親類の人々、そして一人で自由に歩き話せるようになるにしたがって、子どもはみずからその生活圏をますます拡大していくのである。このようにして、幼児の経験領域もおかあさんから家族や親類や友だちへ、そして次第にかれを取巻く大きな社会へと、いわば同心円的に拡大していくのである。このような経験領域の同心円的拡大を、われわれは一般に子どもの成長と考えているわけである。もっとも、このように経験領域の同心円的拡大という場合、当然幼児の歩く、話すといった生理的な条件は必要なものである。歩くことのできない幼児は一人で家の外へ出ることも、友だちと

遊ぶことも自由にできない。話すことのできない幼児は、その意志を充分に他の人たちに知らせることができない。歩く、話すといったことは、人が社会において生活して行く場合、互に交渉し関係することの前提である。それゆえに幼児が生理的に歩き、話しうるように成長するということは、社会的に成長するという場合にも極めて重大な前提条件となるのである。このような理由から、われわれは幼年期の成長発達の特徴を、とくに生物・社会的(Biosocial)な発展とよんでいるのである。

二

以上述べたような成長発達を、われわれは一般にパースナリティの発展ということばでよんでいるが、パースナリティの発展ということは、ことばをかえていえば人格形成の過程ということである。人間の人格はつねに完成されるということはない。人は生れて死に至るまで、つねに人格の形成の過程にあるわけであり、それゆえにわれわれは、人の一生を通してそのパースナリティは発展するということができるのである。このようにわれわれは人の一生を通して人格の形成ということを考えるわけであるが、その場合問題になることは、では一生のどの時期がその人の人格形成にもっとも強く影響しているかということである。ところが、最近児童心理学、精神分析学、文化人類学などの領域で行われているパースナリティ研究の結果は、いずれもますます幼年期の重要性を強調するものばかりで、パースナリティ形成の中心的問題は幼年期に集中されて行く傾向にある。

われわれは人間の成長発達をパースナリティの発展ということばで表現した。しかし、こゝでいうパースナリティとは一体どのようなものであろうか。ここでわれわれの使うパースナリティということばの意味について少し触れておく必要がある。社会心理学者ニューカムは、パースナリティということばの意味するものとして次の四つの特質をあげている。第一は「おのおのパースナリティにおける共通の要因と独自の要因」である。これは、各個人にはそれぞれ独自なパースナリティが存することはもちろんであるが、たとえばマヌス族とかサモア族といったある特定の文化や社会に属する人々の間には、ある共通なパースナリティ特性というものがみられるということである。文化人類学者のリントンやカーディナーはこれを社会的集団的パースナリティとよんでいる。このようにある文化や社会に属する人々は、個々人に独自なパースナリティと同時にその文化に特有なパースナリティの特徴をあわせもつのが普通である。次に第二は「パースナリティは、生活体の環境に対する動的指向を意味する」ということである。生活体としての個人のパースナリティは、生れながらにしてすでにそこにあるというものでなく、身体的な成長と共に、年齢と共に、環境との関係の中で形成されるものである。第三は「パースナリティはいちじるしく社会的相互作用の影響を受ける」ということである。すべてのパースナリティの特性は、なんらかの点で社会的相互作用の影響を受けている。性格や気質に先天的、生理学的決定要因があることは明らかではあるが、そのような特性においても、いちじるしく社会的制約や影響を受けているものである。リントンなどのいう「ステイタス・パースナリティ」というのは、身分や役割によって形成された社会的パースナリティの一面を指すもので、とくに社会的な地位や職業をもつ人々には顕著に現われるといえよう。第四は「パースナリティは持続的、動的および社会的傾性の独自な編成を示す」というこ

とである。パースナリティということばの理解にとってもっとも重要なことは、パースナリティがそのいろいろな特性にもかゝわらず一つの統合された全体であり、持続的なものであるということである。個人はいろいろの特性をもってはいるが、それを一個のパースナリティとしてみる時には全体的な統合的生活体として考えねばならないのである。

以上ニューカムの説くところによってパースナリティの意味する範囲をみたが、このような点からパースナリティというものをもう一度考えてみると、一般にそれは身体的、精神的、情緒的、知的な人間的な特徴を含んだ包括的な全体であるということができよう。われわれが普通人の性格とか気質とかいう場合にもそれはパースナリティの一部と考えることができ、また一般によくいうあの人の「人となり」といったものも、その人のパースナリティということができよう。ところでこのような「人となり」がどうしてできるかといえば、前にも述べたように、個人とかれを取巻く社会的、自然的環境の間の相互関係の中で生じるのである。個人はいわば空白でこの世へ生れ出るのでなく、生れつき固有な要因や素質をもって生れてくる。そこでわれわれのいうパースナリティの成長は、一部は内的な要因に、一部はその社会的、自然的環境に依存しているといえるのである。このようにみて、人格の形成ということを、もっとも単的に表現すれば、その人の持って生れた素質およびその他の個人的特質と環境の相互作用ということができる。しかしこのように、個人のパースナリティが個人と環境との相互関係の中で形成されるといっても、われわれはさらに社会や環境の内でどのような環境がパースナリティ形成に大きな影響力をもつかについて考えねばならない。パースナリティ形成にもっとも大きな影響力をもつ環境はどのようなものかということに対して、教育社会学者オッタウエイは、もっとも重要な環境、それは個人を取り巻いている人間的環境であると述べている。すなわち、かれを取り巻き、かれの成長と学習を通してかれに影響を与えているあらゆる年齢と種類の人々、それが個人のパースナリティ形成にもっとも強い影響力をもっているのである。以上パースナリティの形成ということが個人と環境の相互関係の中で行われ、しかも環境の中では人間的環境が一番重要な意味をもつことを述べたわけであるが、このように考える時、人格形成に関する幼年期の重要性は明らかであると思う。以上で一応パースナリティに関する考察を終え、次には幼年期の具体的な教育問題に進みたい。

三

この世に生をうけた新生児がはじめて接する人、すなわち母の影響は決定的である。成長するにしたがって次第に接触するに至る家族や友達の影響も、その社会性を形成する上に大きな役割を果しているのである。ここに幼年期の教育やしつけがとくに重視される理由があるといえよう。このようなことは、最近の児童心理学や精神分析学の立場からもとくに強調されていることであるが、たとえば精神病学者であるカーディナーは「基礎的人格構造」ということをいっている。これはすべての人が一生を通して幼年期に形成された基礎的な人格をもち続け、したがって、幼年期の諸経験が、将来の人格形成に決定的影響を与えるという主張である。ではこの基礎的人格は何によって形成されるかといえば、カーディナーによれば、人が幼年期において経験する性や衣、食、住に関するしつけ、家族の組織、さらに離乳や大便排泄のしつけの仕

方、すなわちいつどういうふうに離乳させられ、どうして一人で便所へ行けるようになったか、といったしつけ方がその人の基礎的な人格を形成するというのである。このような自分の排泄を自分で行うというしつけの重要さは、最近とくに注目されているようである。たとえば、人類学者メッキールの報告によると、大便排泄のしつけが殆んど行われず、放任されているダコタ・インディアンの場合は、その性格が穏和で物おしみをせず、寛大であるといったことが美徳とされていというのである。ところが一方、大便排泄のしつけがきびしく、早くから行われているマダカスカル島のタナラ族の場合では、その性格は非常に強く、若いうちから強い責任感をもち、義務や忠誠ということを重んじ非常に良心的であるというのである。

このような例は、幼年期の基本的訓練の相違が人格形成にどのような影響が与えているかを示すものであるが、これと同じような事情はわれわれ自身の現代社会の中にも存するように思える。教育社会学者アリソン・デーヴィスはアメリカの中流階級と下流階級のしつけ方の相違を調査しているが、それによると、離乳の時期は、中流階級で平均一〇・五か月、下流階級で一二・八か月で中流階級が約二か月早く、大便排泄のしつけの始まる時期も、中流階級では平均七・五か月、下流階級では一〇・二月かと約三か月早く行われているようである。また、大便排泄のしつけが六か月以前に始められた例についてみると、中流階級では調査対象の四九％が六か月以前からすでに大便排泄のしつけを受けており、下流階級では二三％である。この場合も中流階級の方が早くしつけを始めていることを物語っている。また強制的に離乳させられた子どもについてみても、中流階級では調査対象の二〇％で下流階級の一五％より多くなっている。これに反して「子どもが空腹と思える場合にはお乳を与える」というのは、中流階級でわずかに三％であるに対して、下流階級では三五％と下流がはるかに多く、しつけの程度が下流階級に較べて中流階級がはるかにきびしいことを物語っている。

上の例からみて一般に中流階級の方が下流階級よりもしつけの時期も早く、程度もきびしいということがいえるようであるが、このようなことはたゞアメリカの場合だけでなく日本においてもいえるようである。しかしこの場合、現状は中流階級の方がしつけは早くきびしいとしても、ではしつけはできるだけ早くきびしくやるほどよいか、ということにはまた別の検討すべき問題があるように思える。というのは、幼年期の訓練やしつけを軽視するということでなく、その時期、あるいは方法は慎重に考慮されねばならないという意味からである。たしかにしつけが早くからきびしく行われている中流階級の子どもの方が、しつけのルーズな下流階級の子どもより、責任感や義務感あるいは良心といった点ですぐれたパースナリティを発展する機会が多いのは事実のようである。しかし、だからといってしつけは早く、きびしくすべきであるとは必ずしもいえないのである。もう一度デーヴィスの調査を眺めてみると、すべての点でしつけは中流階級の方が早く、きびしいようである。ところが「指しゃぶり」の経験のある子どもは下流階級では一八％に対して、中流階級では五一％と中流階級の方が圧倒的に多く、自慰行為の経験を有するものも同じく下流階級一七％に対して、中流階級五四％と中流階級の子どもが圧倒的に多くなっている。これを母乳だけで育った子どもが下流階級一七％に対して、中流階級五％と中流階級に非常に少い

のと考え合せてみると、何かしつけの問題とからんで、もっと他にも問題があるようにも感じられる。この場合「指しゃぶり」や自慰行為が中流階級の子どもに多いのは明らかにフラストレイション、すなわち欲求不満の現われだとみることができよう。あまり早くからのきびしいしつけは、逆に幼児の欲求を抑圧する結果となり、その代償として幼児は「指しゃぶり」や自慰行為にそのはけ口を求めようとしているのである。このことは必ずしも望ましい結果ではなく、精神的に必ずしも良い結果を生まないのである。しつけに熱心なあまりかえって子どもの心理を歪めるようなことがあってはならない。たとえば、デュボアがアロール島人について報告しているところによると、アロールの子どもは、生後約二週間目から母親が野良仕事に出て一日中おいてきぼりにするので、激しい食事上の欲求不満におちいっている。母親がまた妊娠でもすれば、離乳の時期は早められ、母親は子どもを払いのけたり、ぶったりして離乳させる。三歳以後は、子どもは年長の兄姉や老人たちの気まぐれな監督を受けながら、一日を家の近くで遊んで過すのである。このような条件のもとでは、寛大なしつけもなく、子どもの気持を励ますようなしつけもなく、いわんや細心のしつけなどはない。かれらは、何々をしてはいけないといわれたり、はずかしめられたり、笑いものにされたり、おどかされたりして物を覚える。このような点からアロール族の成人に顕著な特徴である不安定は、明らかに、幼年期の欲求不満が原因であり、脅威の点から社会を知覚するようになっているからであると考えられるのである。このようにアロール族の場合の欲求不満の主な原因の中には、しつけの気まぐれさ、成人の不安定の子どもへの反映ということとともに、しつけのきびしさということも大きな要因をなしているのである。

このような例から考えあわせて、幼年期の基本訓練やしつけが子どもの将来の人格形成にいかに重要な意味をもつかは明らかである。しかしここで注意せねばならないことは、このしつけや訓練が早く、きびしいほど良いといった類のものでなく、時宜を得た、しかも継続的に組織立ったものでなければならない。そうでなければ効果が少いどころか、かえって害を与えることさえあるという事実である。どのような時期にどのような方法で、しつけや教育を行うかということは幼年期に限らず重要な問題であるが、ことに幼年期の教育が子どもの一生を通して大きく影響するものであるとすれば、この期間のどのような時期にどのような教育をすべきかということは極めて重要な問題となってくるわけである。

四

今まで述べたことからもすでに明らかなことであるが、教育のもっとも重要な問題として、適切な時期に適切な方法で教育するということが何よりも重要となるわけで、ここに人間の発達段階に応じた教育ということが当然考えられねばならない理由がある。発達段階に応じた教育、このような形で教育が行われるとき、はじめていたずらに早過ぎ、きびし過ぎもせず、子どもの欲求を抑えもしない正しい教育の効果を期待することができるのである。われわれはこのような立場からもう一度幼年期を眺め、そこに発達段階に応じた教育的課題を求めてみたいと思う。

アメリカの教育社会学者であるハヴィガーストは、人がそれぞれの発達段階で果さねばならない課題を Developmental Task すなわち発達の課題とよんでいる。この発達の課題とは、人が石段を登る場合の一つ

の石段のようなもので、人は一段一段と石段を踏んではじめて石段を登りきることができるのである。人の一生も石段と同じく、一歩一歩と発達段階に応じた課題を達成することによって進むものであり、人格の形成を助ける教育は、当然この人間の発達の段階に応じた適切なものでなければならないと説くのである。以下ハヴィガーストにならいながら幼年期における発達の課題を、それがどのようにして生じてくるか、またそれが後の子どもの生活や幸福にとってどんな意味があるかを考えてみたいと思う。

幼年期の発達の課題の特色は、それが本来生物・社会的なものであるということである。生物的というのは、これらの課題が、身体の各部分や諸機関の成熟に基づいているということであり、また社会的というのは、成功や失敗などが主として社会的、家族的環境に依存しているということである。このように幼年期における発達の課題は、生物・社会的なものであるが、では一体幼年期の発達の課題とはいかなるものであるかを次に考察しよう。われわれはハヴィガーストにならいながらそのような課題として次の三つの課題をもっとも重要なものとして考えることができる。

一、信頼の基本的態度を形成すること。
二、自律の精神を養うこと。
三、自発活動の促進と良心の発展。

以上の三つが幼年期における子どもが達成せねばならない重要な課題である。

(イ)信頼の基本的態度を形成すること。

まず第一の信頼の基本的態度の形成ということを考えてみよう。生後数か月の幼児にとって、重要な発達の部分はその口である。口は、幼児をとりまく世界のすべてに触れる源である。幼児は乳を飲むことによって空腹を充たすだけでなく、唇や舌や口腔の粘膜がお乳に触れたり、口の中の物に解れたりすることによって、積極的な快楽をおぼえるのである。生後のこの数か月の終り頃になると、幼児の目や耳や手も次第に外界を受け容れることができるようになってくる。こうして生活に対する子どもの最初の基本的態度は、その口や他の感覚器管によって「外界をとり容れる」という経験をとおして学ばれるのである。このような場合、幼児の外界へ向っての欲求が満足されると、かれは居心地のよい満足感を感じ、かれはおかあさんやその他自分の世話をしてくれる人々の愛情にひたるだけでなく、おかあさんに限らず世間のすべての人々の善意を信じるようになるのである。このようにして幼児はおかあさんやその他、かれを取り巻く人々との親密な愛情深い関係を通して、基本的な明朗性をもち、あるいは世の中の善意を確信するに至るのである。

このように初期の幼児の感覚は口に集中し、口の感覚を通してかれはいろいろの経験をする訳である。それゆえに幼児の場合、子どもに食物を充分与えるということより、食物を与える場合の扱い方は非常に重要な意味をもってくるのである。幼児が口を通して受けるいろいろの経験は後のパースナリティの発展に大きく影響するといえるのである。それゆえに、幼児に食物を与える、あるいは口を通して現われてくる幼児の欲求に応える場合は、とくに注意し、その場合の扱い方は幼児に基本的な信頼感を起させるようなものでなければならないのである。このような愛情に充ちた関係の上に立って、はじめて母親あるいは幼児の保護者は、物事の善悪についての判断を幼児に教えることができるのである。もしこの場合の取扱い方を誤れば、幼児はつねに世間を疑ったり、不愉快なことばかり

を予想したり、感情的に不安定な人間へと変って行くかも知れないのである。以上で幼年期において信頼の基本的態度が形成されるということをみたが、次に第二の課題である自律の観念の形成について考えてみたいと思う。

(ロ) 自律の精神を養うこと。

生後二年目になると、幼児は他人に依存する代りに物事を自律的に自分で決定するようになる。そしてこの決定の仕方は、後の性格や人格に大きく影響するものである。それゆえに、幼年期に自律の観念を形成しておくということは、子どもの将来にとって極めて重大な意味をもつものである。この時期は生物学的にいえば、幼児が歩行の自由を獲得し、自分で自由に歩けるようになった時期であり、また排泄を自分の意志で行えるようになった時期でもある。幼児がこのように自分の体を自分で制御できるようになると、歩いたり、座ったり、物を握ったり、それを投げたりする時にいわゆる自制とか自己決定とか自律とかいったことの第一課を学ぶようになるのである。それゆえに、両親にとってこの時期は、便所のしつけをしたり、大切な物を壊したり、危険なものに触れないように教えたりせねばならない重要な時期でもあり、このようなしつけを通して子どもが一人で物事が行えるように、その自律性を発展させる時期でもある。これがこの時期のしつけの教育的な意味なのである。幼児をわきまえのないこんとんたる衝動から守り、幼児がその神経や筋肉を意識的に調整できるまでに成熟してきた場合には、かれに自分自身でことを決めさせるといった、両親や保護者のき然とした首尾一貫したしつけが、この時期にもっとも必要とされるのである。このようなしつけは、子どもに良心を育て、道徳的責任ということを教えるのである。この時期に幼児はばく然とではあるが、善悪の観念を学び、そしてこの善悪の観念が自制とか責任とかいった重要な観念を生んでいくのである。このような自律性を獲得する重要な時期に、もし子どもが適切に取扱われなかった場合はどうであろうか。かれは依頼心が強く、自分で物事を決定できない不甲斐ない人間、あるいは世間に対して敵意をもったわがままな人間になってしまうかも知れないのである。以上のように、この時期に形成される自律性ということも、子どもの将来に大きく影響することがわかるのである。次に第三の課題として、われわれは、自発活動ということと良心の発展という問題を取り上げねばならない。

(ハ) 自発活動の促進と良心の発展

前に述べた、信頼の基本的態度の形成とか、自律性の獲得とかいうことは、幼年期のうちでも割合に初期において学ばねばならない重要な課題である。もし幼児が生後三か年の間に、以上のような信頼感をもった自律的な人間になる基礎を与えられている場合には、次の段階において、すなわち四、五歳の間に自発活動や良心の発達へ向って容易に進むことができるのである。四、五歳までに幼児は自由に歩行し、走ったり、跳んだりできるようになっている。また不思議な世界を想像したり、恐ろしい物事を考えたりするようにもなっている。ことばも次第に正確になり、語彙も次第に多くなっている。この時期の幼児は、身体的にも精神的にも自発活動をなしうる準備がすでにできているといえよう。またこの時期の幼児は、異常な好奇心にかりたてられているのがつねである。自分のからだをもち、自分の筋肉や神経を自分で調整できるようになった幼児は、次には外界へ向って異常な関心を示すようになる。新しい疑

問を提出したり、新しいことをなしたり、新しい世界の探検へ出かけたり、この時期の子どもはすべて新しいものに眼を奪われている。ここに自発活動の源泉がある。このようにして自発活動は未来への働きを意味しているのである。人間が文化を生み出し、新しい発明や発見をなすという創造的な働きの芽が、この時期に生じるわけである。自発活動、それは子どもに夢があるということであり、子どもは自分の夢を実現しようとつねに新しい未知の世界の探検に乗り出しているのである。

このような時期に両親や保護者は、新しいことを進んでなす態度とか、問題の新しい解決を進んでなそうとする態度といった積極的意欲を子どものうちに助長せねばならないのである。そしてこのような態度が子どもに責任とか良心とかいった高度の道徳的意識を発展させる涙ともなるのである。この時期においては両親や保護者は、子どもの積極的活動を正しい方向へ指示し、助長することにつとめ、自発活動の結果、積極的な良心の育成に努力せねばならないのである。そのためには、子どもの自発活動を正しく理解し、子どもに自分の衝動が信頼すべきものだという確信を抱かせることが大切であり、子どもの自発活動の上に立っての正しい方向づけが大切なのである。これに反して、子どもにあまりにも厳格なしつけや作法を要求し、子どもに自分の衝動や、自発活動を少しも信頼させないような教育も時には行われているが、しかしこのような形で懲罰的な厳格な良心を子どもに押しつけることは、かえって子どもに押しつけることは、かえって子どもの好奇心を窒息させ、積極的な自発性を殺す結果になることもありうるわけで、この点充分注意せねばならないことである。この時期に子どもの自発活動を正しく指導するということは、後にかれを積極的な良心をもった建設的な人物へと形成する上にもっとも必要なことであるといえよう。

以上われわれは、幼年期における三つの重要な課題として、第一に信頼の基本的態度を形成すること、第二に自律の精神を養うこと、第三に自発活動の促進と良心の発展について述べてきた。幼年期についてのこのような見方は、生理的な発達に対応して社会的な成長を考え、そこに幼年期の教育やしつけのあり方をみようとするものである。このような見方の他にも幼年期について述べることは多くあると思う。たとえば、遊びや絵画の指導とか、子どもの遊び仲間の関係はどうかとか、あるいは、知能や情緒性の発達とか、社会性の発展とかいった多くの問題もある。しかし本稿においてわれわれの取上げた問題は、子どもの成長発達を生物・社会的なものとして考えるということから、このような発達の段階に応じた適切な指導がなされねばならないという点を述べ、また人の一生を通して、その人格形成に幼年期がいかに大きく影響しているかということから、幼年期の教育やしつけの重要性を強調し、最後に幼年期においてもっとも重要な意味をもつ発達の課題を三つ指摘し、その性質や教育的意味について述べたものである。

（筆者・広島大学教育学部教官）

＊　＊

＊

＊